

【特別研修・在外研究成果報告書】

研究者	所属・職位	氏名
	国際教養学部	置田 清和
研究課題	中世後期南アジアにおける美的経験論の発展：信愛の概念を中心に	
特別研修期間	23年度 秋学期	～ 24年度 春学期
在外研究期間	23年 10月 14日 ～ 23年 11月 28日 (45日間)	
	24年 4月 22日 ～ 24年 7月 8日 (77日間)	
	24年 7月 29日 ～ 24年 8月 6日 (8日間)	
主な研究機関 又は場所	American Institute of Indian Studies、タゴール国際大学、王立アジア協会、カルカッタ大学、ベンガル文学協会、オックスフォード・ヒンドゥー教研究所、ハンブルク大学	
研究成果の概要		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ <u>[個人研究]2023年9月20日～10月13日</u>：American Institute of Indian Studies コルコタ支部において上級レベルのベンガル語プライベート・レッスンを計45時間分受講。特にリスニングと会話に焦点を当てた結果、ベンガル語を通しての会話力、交渉力に飛躍的な向上を達成することができた。</li> <li>・ <u>[在外研究]2023年10月14日～11月26日</u>：インド、シャンティニケタンのタゴール国際大学の写本図書館において <i>Śrīkṛṣṇavijay</i> その他の写本調査。Naba Gopal Roy 博士（同大学ベンガル語学部博士課程終了）、Amitrosudan Bhattacharya 教授（同大学ベンガル語学部名誉教授）との文献 (<i>Śrīkṛṣṇavijay</i>) 講読を実施。</li> <li>・ <u>[在外研究]2023年11月27日～11月28日</u>：シュリランカの首都コロombo訪問。コロombo国立博物館において上座部仏教・大乘仏教・ヒンドゥー教の遺跡、工芸作品を見学。ガンガラマヤ寺院においては現代シュリランカにおける上座部仏教の現状を、カイラーサナータ・スワミ寺院においてはヒンドゥー教崇拝の現状を観察することができた。</li> <li>・ <u>[科研]2023年12月1日～10日</u>：インド、ヴリンダーヴァンの Vrindavan Research Center に於いて <i>Śrīkṛṣṇavijay</i> その他、科研費研究課題(基盤 C、課題番号 23K00463)に関する写本調査を行った。また、今後の共同研究の可能性について検討。Jiva Institute において科研費研究関連書籍購入。</li> <li>・ <u>[科研]2023年12月11日～17日</u>：西ベンガル地域において科研費研究課題(基盤 C、課題番号 23K00463)に関連するヴィシュヌ教ベンガル派の寺院・聖地の現地訪問調査を行った。</li> <li>・ <u>[科研]2023年12月18日～27日</u>：コルコタの王立アジア協会、カルカッタ大学、ベンガル文学協会において科研費研究課題(基盤 C、課題番号 23K00463)に関連するベンガル語・サンスクリット語の写本調査を行った。カルカッタ大学サンスクリット学部において招待講演を行なった。</li> </ul>		

【特別研修・在外研究成果報告書】

・[在外研究]2024年4月22日～7月8日：オックスフォード・ヒンドゥー教研究所において、週に一度の頻度で研究仲間である Rembert Lutjeharm 博士と S. Bhuvaneshwari 博士と共にサンスクリット文献講読(文献校訂・英訳作成)を開催した。また“A Tapestry of Devotion: The *Bhāgavata* Traditions Before Caitanya”題した講演を実施(6月6日)。オックスフォード大学トリニティ・カレッジにおいて開催された *The 40th Annual Sanskrit Traditions Symposium* において“Devotion in the Vernacular Millennium: The Teleology of Mādhurya-nization in Mālādhara Vasu’s *Śrīkṛṣṇavijaya*”と題して研究発表を行なった(5月31日)。

2017年から東京外国語大学アジア・アフリカ研究所の小倉智士博士と進めてきたマツヤ・デジタル化プロジェクトの成果物を今後はオックスフォード・ヒンドゥー教研究所を通してオンラインで掲載する交渉を進めた。その他にも研究所やオックスフォード大学において開催された様々な研究会・学会・シンポジウムに参加し、学会の近年の動向を把握することができた。

6月22日から26日までパリのフランス極東学院を訪問、*An Intellectual History of Late Vedānta* と題したワークショップにおいて研究発表を行なった(発表題名: “Toward a Social History of Greater Vaiṣṇava Vedānta: Difference and Non-Difference in the Gauḍīya School”)。

・[科研]2024年7月9日～7月28日ドイツ、ハンブルク大学において Harunaga Isaacson 教授の元で彼の学生らと共に 13世紀のサンスクリット文献(ヴォーパデーヴァ著 *Muktāphala*, ヘーマドリ著 *Kaivalyadīpikā*)の講読会(文献校訂・英訳作成)を開催した。

・[在外研究]2024年7月29日～8月6日：ロンドンの大英図書館でサンスクリット文献写本のデジタル化に携わった。

[総括]全体的に非常に充実した時間を過ごすことができた。23年9月～12月のインド滞在においては、長期滞在することにより現地での日常生活・文化に深く関わることができた。特に10月には、小説や詩などでよく言及される有名なドゥルガー祭に参加することができ、インド文化に対する造詣を深めることができた。24年4月～8月のイギリス・ドイツ滞在では博士時代からの研究仲間や指導教官との旧交を温めることができた。ただヨーロッパ滞在については現地の物価高騰と円安の影響で食費やホテル代がかなり嵩んでしまった。特に家族を招聘した際に、ロンドンやオックスフォード、ハンブルクの宿泊は大学の規定金額内ではまともな宿を確保することができず、結果として在外研究費を補うために個人研究費や科研費から大幅な補填が必要となった。これから在外研究に従事される先生方のことを考えると、在外研究費の増額や宿泊費の規定額上限の改定などが強く望まれる。

以上